

学校推薦型選抜（文学部）

小論文課題

令和五年十二月九日

一〇時〇〇分～一二時〇〇分

注意事項

- 一、試験開始の合図があるまで、この課題冊子を開いてはいけません。
- 二、この冊子の本文は全部で五頁です。落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所があったら、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 三、解答用紙は、課題（一）用が三枚、課題（二）用が三枚の計六枚あります。解答用紙の指定欄に受験番号（二箇所）、氏名を記入しなさい。
- 四、解答には、必ず黒色鉛筆（または黒色シャープペンシル）を使用しなさい。
- 五、解答用紙は縦書きにして使用しなさい。
- 六、草稿用紙が足りなくなった場合には、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 七、解答用紙、課題冊子は持ち帰ってはいけません（草稿用紙は持ち帰ってください）。

課題（一） 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

著作権の都合上削除

著作権の都合上削除

著作権の都合上削除

(谷川稔編『歴史としてのヨーロッパ・アイデンティティ』所収、井上浩一『ビザンツ帝国と「ヨーロッパ・アイデンティティ」』)

設問 ヨーロッパからのビザンツの見方に表れる、近代ヨーロッパの自己認識について、本文に基づいて八〇〇字程度で述べなさい。

課題(二) 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

倫理学というと高潔な学問であると思われています。ところが高潔なものとは近寄りたく、普通の人間には関係ない存在です。倫理学をそのように神棚に上げて忘れておくのも賢明ですが、絶望の中で、死に場所を見つけないことしか頭にないようなときに、目先に光を見つけられるものが倫理学であってもよいと思います。泥だらけのときに、泥だらけの手で触れられるような倫理学、私が知りたいのはそういった倫理学なのです。

食べ物も衣服も欠如していた時代、これはほんの五〇年ほど前々の日本の姿でした。その時代において、物欲は悪であり、欠如したものを他人より強く求めることは争いに

なり、お互いに傷つけ合うことになりました。奪い合いになると、早い者と強い者が勝利を収め、戦利品を手にすることができません。

現代は〈もの〉余りの時代になっています。商品を求めて奪い合いになるのは、バーゲンセールのときくらいかもしれません。昔は〈もの〉の方が不足していたが、今では〈もの〉を求める欲望の方が欠如しているのです。

欲望が人間の行動原理であって、それを制御するのが倫理的行為の基本となる時代と、〈もの〉が過剰で、それを求める欲望の方が不足している時代において、時代に即した倫理学が欲望の制御を目指すものの姿というのは考えにくいことでしょう。〈もの〉が不足している、欠如の時代の倫理学と、〈もの〉が過剰の時代の倫理学を同じにしたければ、それもそれでよいでしょう。

荻生徂徠は私の好きな思想家です。彼の考えによると、言葉は時代の変遷とともに変遷し、先王の道（道徳）も変遷します（「世は言を載せて以て遷り、言は道を載せて以て遷る」徂徠『学則』）。相対主義を説いているのではなく、もう少し大きな理論を考えています。私も不変にして普遍なる倫理法則など存在しないと思います。もちろん、「ない」と語る次元とは別なところに何かがあるのですが。

〈もの〉が不足していようと過剰であろうと、聖人であれ俗人であれ、人間は欲望だらけに見えます。だからこそ人間は救済されるべき存在なのでしょう。欲望のない天使であれば救済する必要はありません。人間の欲望のなかでも生理的なものは別として、それ以外のものは構成された人為的なものです。典型的なものが「嫉妬」です。人間は欲望まみれに見えながら、実際には欲望欠如症です。だから欲望を貪り求めます。人間は欲望を自分で生産できず、他の人からこっそり盗んできます。もしかすると、人間は欲望が欠如していて、それを隠すために欲望まみれの姿を取りたがります。やりたいことが見つからない人の方が圧倒的に多いのです。

嫉妬というのは他者から欲望を学習する機会なのです。嫉妬の相手をライバルとして見なし、勝つてみたいと人は思いますが、これは欲望を他者から学習した結果なのです。欲望とは基本的に最初は他者の欲望であり、主体は欲望に関しては空っぽです。空っぽの主体は、自分の欲望の体系を構成していかなければなりません。他者がいなければ欲望を学習することはできませんが、その際、その他者はライバルと見なされ、憎まれ、攻撃性を向けられることとなります。嫉みも攻撃性もない人は欲望を持ちにくい人なのです。

あの人に負けたくない、と思える人は、欲望を学習する源泉を数多く有している人であり、豊かな欲望の体系を持っています。「負けず嫌いな人」というのはたくさん他者を嫉妬できる人のことなのです。「欲望に関する真面目な勉強家」と言い換えることができます。これを資本主義の時代における欲望のあり方と狭く捉えてはいけないと思います。欲望と〈もの〉とを比較すると、現在は欲望が欠如した時代として考えるべきでしょう。だからこそ、高度消費社会ではあれほどコマーシャルが流され、必要でない商品を欲しくなるように駆り立てられています。そういう時代において、古代の倫理学に帰

れ、というのは典型的な時代錯誤になってしまいます。

「自分探し」ということがよく語られます。リベラリズムの社会では自由に自分を選べという課題が課せられます。しかし自由な選択は、財産、所得、権利、健康、家族、能力、才能に依存するので、条件のそろっている人にとっての自由であったりします。夢は無限度で、制限のない自由があるというイメージを撒き散らかして得をするのは、一部の思想家と就職斡旋の会社社だけではないでしょうか。自分にぴったりの職業がどこかあつて、それを探せなどというメッセージを発するのは倫理的に正しいのでしょうか。「儲かる者は常に正しい」と嘯くべきでしょうか。適不適は初めから決まっているのではなく、その中で作り上げていくものでしょう。

〈私〉は〈私〉でしかありません。だから〈私〉はどこにもないにもかかわらず、あるかのごとく物語（レシピ）を造り上げ、それを実現するのに必要なものを集め、そのための能力を磨くことによって、目的（自分）を目指す行為の手前に、自分を作るしかありません。自分は、〈私〉の働きにいつも遅刻して現れる臆病な存在なのです。〈私〉を作ろうとする働きによってしか〈私〉は現れません。

ところが、人間は欲望にまみれた存在である、欲望を汚らしいものとして教え込まれます。重要なのは隠すべきことと顕わにすべきことを明確に区分することなのです。幼児は排泄物を親に自慢げに見せに來たりするけれど、それを区別できることが、倫理というハビトゥス^(注)の重要な論点なのです。欲望なき人間は、倫理の外部にいます。欲望なき人間は、ホモ・サケル（聖なる人）であり、保護されるべき人ではありません。救済されるべき人でも、倫理によって守られる人でもありません。

消費ないし廃棄することが高度消費社会の美德になってしまいました。世界の各地には飢えている人がたくさんいるというのに、この実態は残り続けています。欲望こそ金銭や物資・商品が流通するための原動力です。

欲望こそ、悪に傾斜していく発条であるとしても、同時に道徳性、社会性の基礎でもあるのです。欲望がなくなればもう倫理的にはなりえませんが、欲望をなくすのではなく、黒部ダムのようにため込んで制御し、創造的に使用することが「道」ですし、これこそ禁欲なのだと思います。欲望を失った倫理学はミイラのようなものです。

（山内志朗『小さな倫理学入門』）

（注）ハビトゥス 心的諸性向の体系

設問 傍線部「泥だらけのときに、泥だらけの手で触られるような倫理学、私が知りたいのはそういった倫理学なのです」とはどういうことか。本文を踏まえつつ、あなたの意見を八〇〇字程度で述べなさい。